



十戒実践講座

第五章 殺してはならない/〈いのち〉を与えましょう



殺してはならない。

旧約聖書 出エジプト記20:13



兄弟を憎む者はみな、人殺しです。

新約聖書 ヨハネの手紙 第一 3:15



あなたがた信仰する者よ、アッラーを畏れ自分の義務を果してかれに近づくよう念願し、かれの道のために奮闘努力しなさい。あなたがたは恐らく成功するであろう。

クルアーン 5:35



不殺生は正業なり

八正道



人が悪を罪として避けるなら、悪の対極にある善に到達します。殺人によって意味される悪の対極にある善とは、隣人に愛から善を行うことです。

いのちの教え 70

第五章

殺してはならない / (いのち) をあたえましょう。

怒りから全く離れた者、これを私はブラフマンと呼ぼう。

ブッダの言葉 法句教 26 : 9,18

罪と罰

7月頭の、とても暑いある夕暮れ時、一人の青年が、寄宿している屋根裏部屋から降りてS路地裏に現れ、のろのろした、ためらいがちな足どりでK橋をさして歩き出した。これはフォードル・ドストエフスキーの高名な小説、「罪と罰」の冒頭の言葉です。ラスコーリニコフという名の優秀な学生が主人公で、「いつの頃からか」、この学生は、「いらいらした緊張した気分になっていた。あまりにも自分のなかに閉じこもり、みんなから遠ざかって暮らしていた」。そして、さらに「この青年の心には、嫌悪と軽蔑が積もっていた」とあります。読者はすぐに、ラスコーリニコフは、「隠れた夢」である、周到に用意された女地主の計画的殺人のリハーサルに向かっていることに気づきます。小説の冒頭の章では、ラスコーリニコフの心のうちで起こった緊張と苦悶が描き出されています。「犯罪」は未だ行われていませんが、明らかに罰はすでに始まっているのです。*1

*1. フォードル・ドストエフスキー *Crime and Punishment* (New York: Barnes and Noble, 1994), 1-3.

ラスコーリニコフの冷血な犯罪は、「計画的殺人」とされ、犯行に着手する以前に周到に計画された殺人です。これは、一時の熱に浮かされて犯す「衝動的な犯罪」や、偶発的な殺人から犯す「過失殺人」からは明確に区別されます。英語が人の死に関して、様々な状況やレベル、度合の表現ができるように、ヘブライ語も様々な表現を持ち合わせています。旧約聖書は、偶発的に誰かを殺した人間が逃げ込むことのできる「町」について述べています：

知らずに隣人を殺し、["nakah" : ナカー]以前からその人を憎んでいなかった場合である。たとえば、木を切るため隣人といっしょに森にはいり、木を切るために斧を手にして振り上げたところ、その頭が柄から抜け、それが隣人に当たってその人が死んだ場合、その者はこれらの町の一つにのがれて生きることができる。(申命記19:4-5)

この例において、ヘブライ語の言葉"nakah" は、「以前からその人を憎んでいなかった場合」に、偶発的に殺人を犯した場合に用いられます。

ヘブライ語でのもう一つの「殺す」に"shachat : シャチャット"があります。犠牲として動物を殺す行為で、イスラエルの子孫は、「過ぎこしの羊を殺」し、「罪のあがないに山羊を殺」したといわれます。しかし、あらかじめ悪意をもって人の命を力で奪う行為を想定してもものとしては、"ratzach : ラツザツ"という言葉を用います。これは「殺す」と言う意味のみならず、正確には「バラバラにする」「叩きつける」そして「細切れにする」を意味しています。この強烈な言葉は、その音や意味から、人の身体を文字通り、「引き裂く」という最悪の犯罪をイメージさせます。

シナイ山で、この戒が与えられ、イスラエルの子孫にもたらされたとき、彼らが聞いたことは、「"ratzach : ラツザツ"するなかれ。」でした。(出エジプト記 20:13) そのため、現代の学者は疑いなくこの戒を、よりシンプルで一般的に「殺してはならない」というよりも、「(より強烈な) ラツザツ殺戮してはならない」と訳そうとしています。これは神がまるで私たちのそれぞれに、「あなたは冷酷で悪意だらけの人間であってはならない；人の命を奪い、バラバラにし、細切れに叩きつけてはならない」といつているかのようです。

このライズ・アヴァヴ・イット・セミナーでは、この戒の社会的・倫理的な面に焦点をあてはしません。言い換えれば、強盗を殺すのは正しいかどうか、あるいは戦争で人を殺すのは正当かどうかについて論じません。そして、過剰防衛による殺人や、死刑、墮胎、自殺、安楽死を論じようとするものでもありません。これらの問題は、重要で、熟考しなければならぬものですが、このセミナーの中心は、心の中の「嫌悪と軽蔑の蓄積」を注意し、根こそぎにすることにあります。この世の秩序を守るために、法と罰則は不可欠ですが、霊的な正義の法によれば、自分が罪を犯したから罰されるのではなく、犯罪自体が罰自体です。罪と罰は、わかつことのできない間柄なのです。人が他人を嫌悪し続ける限

り、その人は自身をさいなみ、殺し続けます。仏教徒やヒンズー教徒では、「カルマの法」と呼ばれています！逆にいえば、人が嫌悪と軽蔑を認め、これを取り除くなら、「隣人愛」が羽をつけて押し寄せてくることになります。

そのため、このセミナーでは、今日の社会的あるいは倫理的なジレンマに回答をもたらそうとはしません。むしろ、怖れることなく、そして厳しく、自分の <いのち>の内に犯す罪を認め、霊的真理の光に照らして吟味し、心にある、愛から遠く、真でなく、品格のないすべてのものを断ち切ります。尊敬すべき宗教的伝統*2 の、最も高く、貴い教えに従いながら生きようと努力しながら、私たちの意識は、自分の身勝手な意志を超え、どんな状況でも、何をなすべきか、より明確に見極めることができるようになります。これが「ライズ・アヴァヴ・イット」が意味するものです。

*2. スウェーデンボリイはこう書いています：「神は十戒にあるのと同じようなものを、あらゆる宗教に備えられています。：神をあがめなければならない、神の名を汚してはならない、聖日を守らねばならない、親を尊ばねばならない、殺人と姦淫と盗みは犯してはならない、偽りの証をしてはならない。これらを神的なものとして、宗教の名のもとにこれに従って生きる民族は救われます。」 神の撰理に関する天使的知恵 254:2.

物理的殺人

この戒めは、「殺してはならない」と言っています。次の手記は、ある受刑者が、自分の妻を物理的に殺すことになった怒りが、ゆっくりと積もってゆく様を描いています：

今日は15年目の結婚記念日です。妻は息子を過剰な体罰で痛めつけることを正しいと思っています。しかし私は、誰であろうが、自分の息子をぶつのがまんできません。いつか見てるよと思っているうちに、私たち夫婦の溝は、大きく深くなってゆきました。妻が息子を撃つと最後に脅したとき、私は一生監獄勤めということも覚悟の上、妻を殺してしまいました。私自身の大部分とその他多くのものが、彼女とともになくなりました。

自分の怒りに対処する術を知らず、怒りが自分を支配してしまうほど積み上がることを許せば、殺人は起こり得ます。30才の母は、自分が犯してないと言っている殺人で、終身刑の判決を受け、こう語っています：

今日、殺してはならないという戒を、自分の古い傷を開くことで破りました。明日は母の日ですが、子どもたちには会えません。私を無実の罪で刑務所に送りこんだ奴らへの憎しみで私の心は一杯です。私心は、娘を殺した男に対する憎しみであふれています。皆は、赦しなさいと言いますが、どうして私の子の命を奪った男や、そこで止めなかった者を赦すことができるでしょうか。男は他の三人の子も奪ってしまいました。自分にもっと真剣に祈るよう、言い聞かせ、祈ります。しかし聖日や、誕生日、そしてそして普通の日のあるとき、私の傷口は突然開き、さらに深く憎んでいる自分がそこにいます。もし私が銃を持ち、目の前にその男が立っていたとしたら、間違いなく撃つてしまうでしょう。そして、その行いのため、またここに居ることになるでしょう。

殺人によって刑務所に服役中の方々のこれらの記事から、殺人の底には、怒り・敵意・憤り・嫌悪・復讐など天の王国とは全く逆の感情が横たわっているとわかります。これらの証言から、怒りは怒りを産み、嫌悪は嫌悪を産み、殺人が殺人を生むことが分かります。

最初は、様々な理由によって、誰も自分を抑えきることができ、怒りから行動しません。受刑者が怒ったとしても、反撃しなかったのは、仮出獄の機会を失うのを怖れたためかもしれません。教師が、子どもをぶたないのは、自分の評判を損ねたり、職を失うのを怖れたためかもしれません。捨てられた恋人が、復讐のため相手を殺す計画に着手しないのは、逮捕や投獄を怖れたためかもしれません。どんな理由であれ、怒りへの最初の対処方法は、自己抑制です。これは、鬱積した嫌悪や怒りを、物理的なレベルにならなければいいというものではありません。たとえ歯を食いしばり、こぶしがわなわなとふるえても、他人に向けてはならない、と拒絶するのです。

自己認識が進むにつれて、本当に外の、物理的なレベルな行動をコントロールするには、内的なレベルからコントロールしなければならぬとわかります。そして、それは、おそらく単に神がそうおっしゃったから戒を守ろうという決心です。怒り、復讐しようとしている人々を、社会の外的なコントロールは、法によって、それを止めたり、衝動やいわ

れないことで行動するのを妨げようとするかもしれません。しかし、人は社会的な刑罰や、法律によってのみではなく、神の法によって内面を律することが重要です。

次の文は、ある受刑者が、他の受刑者に不名誉な名で呼ばれ、殺してやりたい気分になされたことを書いています。

今日、食堂で、誤解のためか、ある受刑者仲間が、私のことをここでは書けないような名で呼んだ。一瞬緊張が走り、友人たちの色もこわばった。私はかっとなった。そして、もう引き返すことのできない所に行き着こうとして、はっと気がついた。これは、彼自身の問題だ、自分が巻き込まれてはならない。そして私が怒りに囚われるよりも、彼がその始末をすべきであると考えた。私はただ、そこから離れ、偽りの神が私を支配して怒らせようとするのを拒んだ。神よ、この戒を与えていただき、感謝します。

ここで示された自己抑制は、神の戒めに従おうという望みから動機づけられた場合、より意義深いものとなります。この受刑者が、同僚へ襲いかかる衝動を抑えたのは、単に闘いを避け、あるいは収監態度の成績を守るためではなく、「偽りの神が私を支配して怒らせよう」としているのに気づき、それが神の戒めに反していると思ったからです。彼は「もう引き返すことのできない所に行き着こうとして」いたにもかかわらず、戒めを思い出し、これが他の「受刑者の問題」であると見切りしました。

殺人のレベル

殺人が起こる段階はたくさんあります。ユダヤの伝統的な話のなかに、地元のラビに対して、悪意のあるうわさを流した男の話がありますが、それでよく比喩されています。自分のやったことが悪かったと感じたので、男はラビのもとに向いて、おわびに何かできるかをたずねます。ラビは男に、枕を持つくるよう言います。男がそうすると、ラビは岡の上に登り、その枕を裂いて、中にある羽を風で飛ばせといひます。男はラビの指示に従います。岡の上に着くと、枕を引き裂くと、羽がすべてなくなるまではたきます。すると羽は様々な方向に飛んでゆきます。男はラビのもとに戻って問います。「これでよかったですか？」ラビは「全く足りない」、「出て行って羽をすべて集めなさい」といひます。男は、「そんなことは不可能です。あらゆるところへ飛んでいったからです」。ラビは男を見つめながら言ひます、「そのとおりに。あなたが語った悪い噂も同じ事です。あらゆるところに広がり、取り戻すことはできません」。

この話は、他人の評判を傷つけることで殺人を犯すことができることを示しています。他人の評判を、悪評を流すことで、ぼろぼろに「引き裂く」のです。単純に「人格否定」とも言えます。ある参加者は、「どんなナイフよりも鋭く切れる言葉がある。人の魂を切り裂き、不具にしてしまう」、と語ります。これが旧約聖書で、「人々の間を歩き回って、人を中傷してはならない。あなたの隣人の血を流そうとしてはならない。」(レビ19:16)と固く戒められている理由です。

次の文章は、70才の黒人が、頭の中そして言葉で殺した、たくさんの人のことを語ったものです。

この課題は、自分の心に一番グサリとききました。私は今でもこの戒に反していますし、直ちに祈っていただかねばなりません。自分が心の中で、何度も殺人を犯したことを知っています。心には、頭と言葉で殺したたくさんの人を思い出すことができ、墓地把を埋め尽くしています。

たしかに、時にわたしたちも「人格殺人」を犯しており、他人の名譽を傷つける「中傷屋」となって歩き回っています。また、たしかに自分が、人の言ったことや行ったことを、「切り裂き」、「引き裂き」、ナイフよりも鋭い言葉で、「貫き通して」いることがわかります。自分に正直であれば、自分は先の黒人の友と同じで、靈的に殺した人は「墓地把を埋め尽くしている」、と認めることができます。

あるアメリカの銀行の幹部は、これを深く洞察して書いています：

私は自分がいつも、共通の敵、それは特に特定しない、「やつら」を創りだして喜んでいたことに気づきました。そしてどんちゃん騒ぎのパーティで、自分の味方を募っていました。たいていは、この殺される敵は、ある特定の人物ではなく、広い意味での「やつら」です。最初見たときは、「誰をも」そして「何物をも」殺さないため、これは殺人を戒

めた戒の例外である、とばかり思っていました。しかし、実は私のやっていたことが大量殺人であったことに気がついたので(*_*)! 私は「やつら主義」に名を借りて、人種差別主義者のように、大量殺人を行っていたのです。たとえ教会であっても、「伝統的」な礼拝を好む人々が、「手をたたいて礼拝する」おめでたい連中と非難し、「手をたたいて礼拝する」側が、「会堂でこそこそ」するやつらと非難するようなものです。

仕事で、私たちは自分たちに対抗する他の会社を徹底的にこきおろします。しかしおそらく個人的には一人くらい「良い奴」がいるはずですが、それは彼が私たちに賛同するからだと言います。そうして残りのすべてを気ままに殺してしまうのです。

この方は、自分が大量殺人に係わっているとしました! うわさ話をしたり、「群衆心理」が働き出して、批判的な雰囲気醸成しだし、そこに自分を委ねてしまうのは、ある意味、魅力的なことです。特に自分が傷つけられ、虐待され、誤解されたときは、そうなります。自分の言葉がねじ曲げられ、嘘・偽りのことが自分に関して語られると、復讐してやろうという気持ちが湧き出て、傷つけ、死に至らず言葉を直接投げ返したり、間接的にうわさや中傷、陰口を流したりして、やり返そうとしたくなります。

次の文は、女性受刑者が、永くつきあってきた男が、電話をかけても受け付けられないので、打撃を受けたときのものです。自分の内に、怒りと復讐の感情を認め、「仕返ししてやろう」と企めば、それは「殺人を企てる」のと変わらないものであることだ、と気づくようになりました。

今晚、友人に電話をかけました。実は何日も彼に電話し続けています。そしてやっと彼と電話がつながりました。しかしオペレーターは、電話受付を断り、電話を切ったと伝えてきました。頭の中をいくつかの考えが駆けめぐりました。私は彼と生涯の最良の時を共にしました。何週にも渡り、毎日彼のことを考えました。何故彼は電話を受け付けてくれないのでしょうか。

自分に向かってこう言いました、「仕返しして当然よ。ここを出たら、もうあの男とは関係ないわ。彼を無視して、私が味わった傷と苦しみを、彼に味わせてやる」。しかし今週の課題が、頭をよぎりました。仕返ししてやることは、殺人を企むのと同じです。

私はこのことに関して、祈りました。神にこの思いを取り除いていただくよう祈りました。かつては彼と私は本当に結ばれていたことを思いだし、またいつか同じように結ばれると思いました。彼のいいところ、そして私が彼を愛したことを考えました。祈りながら眠ってしまいました。

今日は、全く新しい日がやってきました。ぐっすり睡眠をとれ、今朝は新しい気分で目覚めることができました。

次の文は、別の受刑者が「殺すなかれ」の戒を思い出すことで、自分の怒りを抑えることができ、緊迫した時においても異なった対応ができたことを書いています：

この週に、ある問題が起こりました。私は戒を破ってしまうと思いましたが、神のおかげでなんとか守れました。若い男が私の足を踏みつけ、彼が謝るのを待っていましたが、彼は踏みつけたということ自体を無視したのです。そこで私は彼に言いました。「君、僕の足を踏んだよ」。と云えば、彼は「おまえなんか知らない」と逆ににらみつけてきました。彼はなんとも思っていないように見えます。私はもっと周りに気を遣って欲しいと言いました。すると彼は私に、もっと慎重になれと言いつつ返します。なんということをして・・・。人の足を踏んでおきながら、おまえのほうがとろいと言うなんて!

そのとき、そいつをぶっとばしてやろうと思いましたが、食堂に並んだ列の前に、同じクラスのジョー・ピーターがいたのです。私は課題を思い出しました。そこで私は怒りを鎮め、謝りました。神がジョーを使って、大事な戒を思い起こさせてくれたのだと感じました。怒りにとらわれずに、自分自身を反省しました。

霊的殺人

肉体と霊を同時に殺してしまう、古典的かつ胸が締めつけられるような例が、シェークスピアの劇、ジュリアス・シーザーにあります。体を突かれ、死に至る傷を負って、血を流しているシーザーが、目を上げると、最高の親友であるブルータスがいいます。ブルータスは、彼を裏切る陰謀に加わっていたのです。そこでシーザーは、かの有名な文句を口にします、「ブルータス。お前もか?」。のちほど、葬礼でマーク・アントニーが裏切りの苦痛について、「最も無情な一撃」と葬送演説の中で述べています。

これは最も無情な一撃、
気高いシーザーが、自分の刺し傷を見ながら
忘恩という、より激しい裏切り者の武器に打ち負かされた。
彼の心の力は、消え失せた。

(ウイリアム・シェークスピア「ジュリアス・シーザーの悲劇」第3幕シーン1、2)

これは、深く刺されたというよりも、むしろ裏切りによって鋭くえぐられたと言った方がよいでしょう。これはシェークスピアの作り話ではありません。実際にあった事実です。つい最近、ある友人が、人前で妻が自分を笑いものにした話をしてくれました。「妻がナイフを取り出して、私の肝をえぐりだされたように感じた」と言います。

この戒から自己点検してみて、最近、自分が「誰かを背中から突き刺した」ことがないか、見てください。自分の言葉が、辛辣で鋭い刃を持ってはいませんか? 飛ぶ鳥を撃ち落とすように、他人の考えを「やり玉にあげて」はいませんか? 努力している他人の足をひっぱたり、希望に水を浴びせかけたり、夢を砕いたりしていませんか? 人は私たちがいることで、励まされ、勇気づけられ、高揚し、生命力に満ちているのでしょうか? それとも、私たちがいるため、傷つき、落胆し、意気がくじかれてはいませんか? 自分の他人に語りかけ、あるいは他人のことについて語る声は、優しいですかそれとも冷酷ですか?

向上心に燃える若者が「世界のために何か善いことをしたい; 今までの自分とは違ったことをしてみたい」、たとえば、「君は君でしかない。そんなことは起こらないよ。忘れなさい」とがっかりさせる応えが返ります。小さな子どもが、母親の手伝いをしようとテーブルの上をかたづけかけていますが、皿を割ってしまいます。母親は非難のまなざしで、じつとにらみます。次からその子は、テーブルに寄りつかず、お手伝いもすることがないでしょう。父親が息子に嘘をつかれて怒っています。「おまえは嘘つきだ! お前を信用していると思っているか? お前なんかどうせろくな人間になりはしない」、この言葉に少年の魂は殺されました。

聖典は、この人間の性向に対して、きわめて直截な警告を発しています。例えば、イスラムの聖典では、直接あるいは当てこすりによっても、他人のためにならないことを言わないよう強く戒められています。さらに、それが「事実を語ろうとも」、「心にけがれがないか」、言葉の裏にある動機を自ら点検するよう推奨されています。「災いなるかな、言葉や行い、侮辱やあてこすりで中傷するすべての者。災いなるかな、陰口をたたく者。たとえ事実を語ろうとも、その心はけがれている」。これに続き、このようにして霊的殺人にたずさわる者に起こることが続いています。「怒りの火が、その者たちの上に広がり、頭と心はしぼんでしまう」。(クルアーン 104 序)

次の文は、最もあってはならないところ—教会の助祭会議で起こった、「霊的殺人」のことを記しています。この戒は全人類に向かって下されていて、例外は一人もなく、教会の指導者についてもそうです。

火曜日、定例の助祭会議に出席していました。そこではきわめて繊細な問題を取り扱っていましたが、全員が同意に達しているわけではありません。そこに座っていると、きわめて批判的な雰囲気さらされており、私自身も同胞であるキリスト教徒を、鋭く批判していました。我々「教会指導者」が、「殺してはならない」という戒を全く知らないような状態になっていたことに、ショックを受けました。議論も感情も極に達したとき、助祭全員に、自分たちは主の仕事をしており、その仕事に当たっても、主の法と命令に従わねばならないと訴えました。殺してはならないという戒は、一通りの意味だけではなく、他人を中傷したり批判したり、そして茶化したりしても、その人の人格を破壊することで殺人を犯すと喚起しました。

この意見のせいで、会議の雰囲気は変わり、よりキリスト教徒らしい雰囲気の中で進めることができたと思います。戒を思い出

させることができたのです。

人生のどんな状態にしようと、それが教会であれ、刑務所であれ、会社であれ、台所のテーブルのまわりであれ、自分におこる思考をじっと見つめ、役に立つものだけを選び、人を傷つけないように表現しなければなりません。インドの聖典にはこうあります。「彼に、身体（身）と言葉（句）と意（意）によって為された悪が存在しないなら、三つの状況（身・句・意の三業）によって〔自己が〕統御された者であり、わたしは、彼を「婆羅門」と説く」。(法句教 26:9)

殺人を禁じた戒は、このように、肉体的な面を超え、及びます。これを深く学ぶにつれて、この戒は人の物理的な行動のみならず、思考や感情までも及びます。イエスは、この戒のより深い意味を告げています、

昔の人々に、『人を殺してはならない。人を殺す者はさばきを受けなければならない。』と言われたのを、あなたがたは聞いています。しかし、わたしはあなたがたに言います。兄弟に向かって腹を立てる者は、だれでもさばきを受けなければなりません。兄弟に向かって『能なし。』と言うような者は、最高議会に引き渡されます。また、『ばか者。』と言うような者は燃えるゲヘナに投げ込まれます。(マタイ 5:21,22)

これを示すために、殺人によってより深く意味されるものを学んだ父親が書いた文を、次に示します。

今朝、電話のベルがなりました。ベルは何度も鳴り続けます。日曜の朝の7時。私はまた床を離れたくありませんでした。6回目のベルに、ベッドを跳ね起きて、電話のところに急ぎましたが、電話は切れてしまいました。「ジェイソンにちがいない」、私は思いました。「昨夜、彼は友人の家に行っていたのか許可を求めたが、泊まるとは言っていなかった。朝の7時に、電話で家中を起こし、私に電話に出させようとした。無神経で、自分勝手な奴、不心得者・・・」

そのとき、突然この週の課題が頭をよぎりました。：「殺すなかれ、(いのち)を与えよ」

私は自分の息子を、冷たくつきはなして考え続けていたことに気づき、直ちにその思いから離れました。すると不思議なことに、たちまち、今まで考えつきもしなかったような、新しい考えが浮かんできました。突き詰めれば、自分の子ども達が、今まで育ててきたように、ベジタリアンとならなかつたら、どう思うかということです。もし子ども達が、大人になって肉食をおこなえば、非常にがっかりすると思っていました。動物を殺したり、その肉を食べるのは、よくないことだと考えていたからです。ところが、思いついた新しい考えは、今までのなかで、最も優しさに満ち、温かいものでした。子供らが、ベジタリアンにならなくてもいい。私は、親として、こんな生き方があると教えるチャンスを得ただけで、最後に選ぶのは、あくまで彼ら自身だ。

後になって、電話は息子からのものでなかったことがわかりました！昨夜は予定していた時刻に家に帰り、予定していた時刻にベッドに入っていたのです。一私は無実の人間を殺そうとしていたのです！赦せ、息子よ。私は動物を殺すのは嫌うが、頭の中で冷たく考えることで、君を殺すような男だった。

先のことばがよみがえってきます。「人を殺してはならない。人を殺す者はさばきを受けなければならない。・・・しかし、わたしはあなたがたに言います。兄弟に向かって、理由なく腹を立てる者は、だれでもさばきを受けなければなりません」。この「理由なく」(この句は当初、新約聖書の写本にはありません)という句は、時として人をつまづかせます。これを自分の嫌悪や、復讐そして殺人の感情を正当化するための、「除外条項」として用いる人がいるからです。人は時として、自分が怒る「権利をもっている」と感じることがあります。「正義の怒り」、「天のさばき」「正当な怒り」などということがあります。しかしこれらの言葉は、しばしば独善や他人の行為の曲解を正当化するために用いられます。(第8章で詳述) 例えば、次の文章は、ある人の独善的な対応が、霊的な殺人の形をとったものです。

この週末、ある交差点にさしかかりましたが、信号が赤にもかかわらず、道を渡ろうとする者がいました。急ブレーキをかけて車を止めましたが、あと数フィートで、その車と危うくぶつかるころでした。そうなっていたら、この戒を文字通り破っていたことになったでしょう。しかし、これでは終わりません。非難の思いが頭にうかんできました。友人と私は、向こうのドライバーは「少しおかしいんじゃないか」と話していました。そこで自分がこうしゃべったことをよく覚えています：「あの状況で、こちらに向かって警笛を鳴らすなんて、どんな神経をしているんだよ！」 他人

がルールを破ったときや、悪いことをしたり、こちらの生命を危なくさせたりしたとき、調子によって相手を批判するのは、たやすいことです。

落ち着くまで、数分路肩に車を止め、何がともあれ自分たちは神のみ手の内にあることを思いました。私にとって苦々しいときでした。私が7才のころ、母と二人の姉妹が、同じような交通事故で亡くなってしまったのです。

この文章では、命にかかわる自動車事故で、強い感情が出てきました。この方には、母親と二人の姉妹の悲劇的な事故死という、子ども時代から深く沈んでいる感情も伴っています。彼の動顛や口にした、「どんな神経をしているんだよ！」という言葉も、よく理解することができます。しかし、次に続く彼の文章と、深まってゆく自己点検の過程をご覧ください。

後で思いついたことですが、相手側も、自分が赤信号で交差点に飛び込んだことを知ったなら、一どんな理由であれ一警笛を鳴らさざるをえず、これは不法でも傲慢でもありません。この状態では、おそらく最後に残った手段でしょう。スウェーデンボリイは、天使は、人が行くことすべてに、善かれと願って、割り込んでくると書いています。このような場合、善い割り込みがあったのだと思います。

この方は、いわゆる「怒って当然」であったにもかかわらず、霊的な殺人を犯すことを正当化するものではないと気づきました。相手のドライバーを非難することよりも、より高い途を選びました。彼は「天使のように」、起こったことに、善い解釈をしたのです。

優しいですか？ 正しいですか？ 役立ちがありますか？

私たちはたしかに、まだ天使ではありませんが、そうなるように努力することはできるはずで、人に話したり、人のことを話すとき、自分の口から出てくることを観察することができます。イエスが言われたように、「口にはいる物は人を汚しません。しかし、口から出るもの、これが人を汚します」。(マタイ15:11)

他人に対して何を言うか、他人をどう語るかによって、人の本質的な人格があらわにされます。古いドイツの諺にも、「人の会話は、その人の人となりであらわす」とあります。*5 ジョン・マルクス著「世界に広がる、いのちの法則：200の普通の霊的原則」(フイテールワア：テンプルン ファウンデーション,1997) 336

人がしゃべる言葉はすべて、その人の魂の状態を語っているという考えは、新約聖書に明白に語られています。「まむしのすえたち。おまえたち悪い者に、どうして良いことが言えましょう。心に満ちていることを口が話すのです。良い人は、良い倉から良い物を取り出し、悪い人は、悪い倉から悪い物を取り出すものです。」(マタイ12:34-35) しかし、パリサイ人は、これを聞いていませんでした。その代わりに、イエスの行ったことすべてを悪意で解釈しようとしました。例えば、イエスが悪魔を投げ出すと、彼らは、それは、悪魔の支配者バルゼブルを使って行ったと言い、;イエスが、萎えた手を癒せば、軽蔑と非難を投げかけます。人が癒されたことを喜ぶ代わりに、イエスが安息日に「働く」ことを非難したのです。

彼らが非難していたのは、本当はイエスではなく、彼ら自身であったのです。イエスは続けてこう語ります。

わたしはあなたがたに、こう言いましょう。人はその口にするあらゆるむだなことばについて、さばきの日には言い開きをしなければなりません。あなたが正しいとされるのは、あなたのことばによるのであり、罪に定められるのも、あなたのことばによるのです。(マタイ 12:36-37)

口に入るものが問題となるわけではありません。口から出るものが問題です。自分の言葉によって、人は正しいとされ、同じく自分の言葉によってとがめられます。人が他人のことを語っているとき、その声音や選んだ言葉は、その他人のことよりも、しゃべっている本人のことを語ります。語る言葉が、人をあらわします。それは心の欲望をあらわします。人の〈いのち〉(人がしゃべり、行うこと)の外にあらわれる行動は、内にある思考や感情から生じます。人の言うことに注意を払うことで、あるいは人がそれをどのように語るかで、人がどんな気分であり、どんな人間であるかがよくわかります。

今まで指摘してきたように、霊的成長の最初のステップは、偽りの神を認めることであり、見てきたように、殺人的な怒りは、まちがいなくその一つです。そのため、人は怒りの萌芽の段階で、それを見極めねばなりません。望まない雑草は、最初に出たときに引き抜かねばなりません。そしてそのとき自分に足りない性質—我慢強さ、慈しみ、赦し、勇気など、そのとき必要なものはなんであれ、祈り求めねばなりません。祈りによって人は安息日の静けさに移りながら、自分の中に愛の感情がわきだし、気高い思考が起こり、そして時として語る言葉さえ出てくるのを認めることができます。自分の伝えたいことが、相手には聞きづらいものであっても、伝えることに神の愛と慈しみが満ちれば、相手によく伝わるか、少なくとも思ったよりも抵抗なく伝わるものです。例として、次の若い父親の文章を参照してください：

物事は、愛がこもった気持ちから、事実在即して、より優しく、そして快活にしゃべることができると学んでいます。いかめしい脅しや罰は必要ありません。例えば、朝の7時に息子の部屋にいてベースボールカードを片付けてくれと頼みました。30分たっても、まだかたづけしていません。自分の気持ちを押し殺し、あるいは怒りで自分と、息子の両方を殺してしまうのではなく、私は息子のことを心にいだいて、小さな声で祈りました。

なんと、それはうまくゆきました。全くもめることなどなく。息子は直ぐにかたづけました。ああ、なんと良い気分だ。「息子がいうことを聞くようにするには、本当に怒らねば」と語り続ける、残忍な気分を斥けることができたのです。

この父親は、怒りや辛辣ないやみなしに、息子が協力してくれるよう優しく話すことを学びました。この父のように、健全な会話の型を学び、行わなければなりません。そのためには、一週間の間、みなさんには、人を批判せず、また誰のことも批判しないようにしていただきます。

ある人々にとっては、最初これは不可能ではなくとも、困難なことかもしれません。例えば、「しかし、私は母親で、自分の子どもの問題を指摘するのは私の責任です」。「でも、私は品質管理のプロです。指摘するのが私の仕事であり、私はこれで食べています！」また、「私は教師です。試験や宿題を評価して、直してやらねばなりません。これはどうですか？」これらの質問に、もっともらしい答えをするよりも、患者を助け、癒すのに用いる外科医のメスと、傷つけ・殺すことに用いる暗殺者のナイフには違いがあると指摘しておきます。こういうわけで、参加者には、しゃべる前の内にある態度、さらには、言葉を慎重に選んだり、それを話すときの話し方に注意を払うよう求めています。この過程を援助するため、三つの「門」*6（または質問）を頭に描いて、話す前に言葉がこれをパスできるかどうか問いかけます。：優しいですか？ 正しいですか？ 役立ちはありますか？

*6 アラブの諺を適用したもので、「しゃべる言葉には、三つの門番がいる」。

優しさは？



正しさは？



役立ちは？



これらの門は、時と場所、そして知恵を考慮しなければ通れません。最高のタイミングと条件を選び、賛同を受け、そして反対を最小限とするよう、賢明な方法を練習しなければなりません。例えば、冷たい目で見つめながら、子どもをしつけても、子どもの心は荒れるばかりです。たとえ言っていることは正しくとも、子どもが感じていることは、優し

くもなく、役立ちもしません。しかし、同じ言葉でも、うまい状況をつくり出して語れば、優れた効果を生みます。次の例は、扱いにくい問題を語り合うために、親が教師と特別なミーティングを設定したものです：

今週、中間テストの成績が返ってきました。そこである教師が息子のレポートに、納得のゆかない点をつけました。学期中の成績も、求めた課題を提出しなかったということで、ずっと0点であると、女性教師はいいます。この教師とは、以前もこの問題で、何度もぶつかっています。その時は、私は切れてしまい、なにかにつけ批判的になりました。

教師にミーティングを求める文を書きながら、とてもひが目になっていました。しかし今週の課題を思い出しました。数分間、祈りながら導きと明るい展開を求めました。この祈りの後、その文は批判的にならずに、書き終えることができました。自分の言葉を注意深く選び、優しく、正しく、そして役立つようにしました。その文によって、この教師と会うことができ、教師も私も、批判的にならず建設的な解決を見出すことができました。この戒を守っただけで、こんな建設的なコミュニケーションが開かれるとは、驚きです。

どんな状況であっても、選んだ言葉は、相手との関係に絶大な効果をもたらします。愛する心から優しく語り、正直と誠実さから、正しく語り、時に応じて、最も役立ちを果たせるような方法で賢明に語れば、人の言葉はたくさんの扉を開きます。現世だけではなく、来世もそうです。「心に満ちていることを口が話すのです。良い人は、良い倉から良い物を取り出し」ます。(マタイ 12:34-35) *7 スウェーデンボリィも「天使たちは、思考から出るほんの一言からでも、その人の霊の性質を知ることができます」(天界の秘義 6623) と書いています。

隣人を愛する

十戒は、見事なほどまで秩序だっており、ある一つの戒を守ることで、次の戒を守るべく導かれます。前の戒では、「聖徒の集い」に感謝と礼を述べましたが、その方々たちは、私たちを霊的旅路で励まし、助けてくれる方々です。今度は、私たちが、他の方々を励まし、助けてあげる番です。人に励ましと慰めを、与えることができます。私たちは、他人に〈いのち〉を与え、「聖徒の集い」の一部となることができるのです。

自分を深く傷つけた者を完全に赦すことは、今のところできかねるかもしれません。しかし、自分の人を殺す思考や感情を避けることはできます;他人にどこか善いところがないか探そうとすることもできます;人の持って生まれた長所をさらに伸ばすよう励まし、そしてそうすることで、人のことを善く見てあげることができます。クルアーンに「アッラーはあなたがたとあなたがたが (今) 敵意を持つ者たちとの間に、あるいは友情を起させることもあろう。本当にアッラーは全能であられ、またアッラーは寛容にして慈悲深くあられる。」とあります。(60:7)

言葉だけではなく、行いだけでもなく、思考によっても、他人に〈いのち〉を与える人となることができます。イエスが弟子に、隣人を愛することを教えた時、その敵をも愛し、自分を呪う者をも祝福し、自分を嫌う者にも善いことをし、意地悪く、迫害する者のために祈ることをも教えられました。(マタイ5:43-44) 言い換えれば、人は友人や敵にいいことをするだけでなく、善く思っただけでもできるのです。イエスが語られたアラム語では、「隣人 (カレバク)」は、時々において心に浮かぶ人物のことを指しています。*8 これはすなわち、誰であろうと頭に思いついた人物が隣人であり、それは霊的な現実においては、その時もっとも身近にいる人物であるからです! 愛すべき隣人とは、「道ですれ違う人」だけではなく、「心に浮かんでくる人」でもあります。

これは、大きな挑戦です。事実、私たちの多くにとって、人に批判をする身に付いてしまった習慣(言葉であれ、心であれ)を捨てることは、自分の〈いのち〉を捨てるようなものであるからです。「話し方の倫理」の講師、ラビ ジョセフ・テルツキンは、いつも聴衆に対して、人に直接あるいは間接に、思いやりのないことを言わずに24時間過ごすことができる人、手をあげてください、と問いかけます。ほとんどの人は手をあげません。すると、こう言います。

24時間、酒抜きでいられない人は、アルコール中毒です。煙草を24時間止められない人は、ニコチン中毒です。同じように、24時間、人に厳しいことを言わずにはいられないなら、あなたは自分の言葉をコントロールできない方です。*9

隣人を愛することは、自分の言葉をコントロールするだけでも学び始めることができます。人に直接あるいは間接、意地悪なことを言わないようにすれば、神が愛の思考と優しい言葉に流れ込む道を開くことができます。スウェーデンボリイが書いているように、「殺人によって意味される悪の反対の善とは、隣人への愛の善です」（『いのち』の教え70）。

*7 この訳は、「ザ・ブック」（Wheaton, Illinois: Tyndale House Publisher, 1986）, 950.

*8 「アラム語からの教え」を参照：Selected passages from the Khabouris Manuscript, An Ancient Text of Syriac New testament（The Yonan Codex Foundation: Atlanta, 1970）,17. ダン・マクドナルド、〈いのち〉の法機関（アルバニー・ジョージア）の教示に感謝。

*9 ラビ ジョセフ・テルツキン、「傷つける言葉、癒す言葉：言葉を賢明に選ぶには」ヒルズデール大学での講演1995年9月から。

課題: 〈いのち〉を与えなさい

この課題は、人を殺すというよりも、さらに進んで、人に〈いのち〉を与えることを求めます。私たちのほとんどに、優しく、正しく、役に立つ言葉を語らせる（一週間、意地悪なことや、批判は口にしない）ことは、困難な課題です。そのため、私たちが養う、特別な食物が必要となります。物体としてのパンが、地上の食物の象徴であるように、天（神の善）からくる、「パン」は、霊的食物の象徴です。瞑想しながら、祈りや聖典の読書や熟考を通し、またこの戒を守ることによって、私たちは、いついかなる時でも神が与えてくれる天のパンに気づき始めます。まことに、「これは天から下ってきたパンで」（ヨハネ6:58）あり、世界に〈いのち〉を与えます。

課題

殺してはならない：〈いのち〉を与えなさい

誰に対しても、誰のことも非難してはなりません。
優しく、正しく、そして役に立つことを語りましょう。

この戒を守ることのできた体験を、メモに書き出しましょう。

さらなる深い学習と応用へのヒント

瞑想：「私たちの日ごとの糧を今日もお与え下さい」という願いは、霊的な食物を求める祈りです。慈悲深い感情や気高い思考のすべてが、私たちの「日ごとの糧」です。「私たちの日ごとの糧を今日もお与え下さい」という文句を瞑想することで、この戒を守ってみましょう。毎日、数分心に、「私たちの日ごとの糧を今日もお与え下さい」という文句を思い浮かべ、物理的な食物が人の物理的肉体を養うように、神の愛が、霊的〈いのち〉を養うことを思い出してください。

活動：パンを分かち合う

グループで、全粒粉でできたパンの小さな固まりを回します。各人は、順番に、パンを少しづつとりながら、「今週、私は・・・することで、〈いのち〉を与えることができました」、と言います。パンの一部を食べた人は（自分の〈いのち〉に神の愛を受け入れたという象徴）、次の人に残りのパンを渡します（神の善が、自分を通して、人に渡ることを象徴します）。

活動：即言い直し

自分が議論に熱中し、きついことや悪口を口にしたら、「即言い直し」しましょう。これは、自分のやっていることをストップさせて、このように言います、「すみません、言い直します」。そうして、意識して、声の調子もほがらかに、優しく、正しく、そして役に立つ言葉を選びます。

活動；星取表

この活動の目的は、自分がどんな環境で、どのくらい、この戒を守り、あるいは破っているかを意識し始めるために行います。自分の行動を、「星取り表」で、きちんと記録しておきます。☆シールを買って、表に貼るか、手書きします。楽しいので、☆シールを使ったらいかがでしょう？いい効果があります。

星取り表の上に、週の毎日を三つの部分に分けます。午前・午後・夜です。一日のその時間帯の間、自分の言葉をすべて、優しく、正しく、そして役に立つようにできたら、その部分に星を付けます。失敗したり、危なかったりしたら、表に簡単にその状況を書き、手記にその体験を記します。週の終わりまでゆけば、どんなパターンがあるか注意してみてください。午前も午後も夜も守れなかったとしても、あきらめないで！うまくゆくためには、より時間を細かく区切っても結構です。（一時間単位でも）新しい時間帯がくれば、それは新しい始まりです。—新しい習慣を創りだす、新しいチャンスです。

手記への記入

手記に、この戒に関する、星取り表の詳細を書いてみましょう。今週は、〈いのち〉を与えることはできましたか？学べたことはありましたか？

星取表

これは、あなたの霊的成長を正しく記録するための星取表の例です。

	午前	午後	夜
月	会社への途中、他のドライバーを非難	同僚に文句	子どもをどやしつける
火	会社への途中、他のドライバーを非難	☆	☆
水	☆	☆	上司の不満
木	☆	☆	妻の批判
金	会社への途中、他のドライバーを非難	☆	帰宅の途中、他のドライバーを非難
土	雑用を誰も手伝わないので不満	妻の批判	☆
日	教会への途中、他のドライバーを非難	☆	☆

注意： この表は月曜から始まり、一週間続いています；しかしいつはじめても結構ですし、必要なだけ長く続けます。日を3つに分割せずに、早朝・午前の前半・・・等、より詳細にわけてもかまいません。自分の行動を表にすることで、自分がとげとげしくなる時間帯や、場を把握することができます。次のページには、空白の表を用意しています。

	午前	午後	夜
月			
火			
水			
木			
金			
土			
日			